

[原著論文]

日本語授業をより効果的にするために —職業日本語におけるタスク中心の指導法について—

張 冬梅*

How to Improve Teaching Efficiency of Japanese Courses —The Application of Task-based Language Teaching in Vocational Education—

Dongmei ZHANG*

Abstract

The research of the application of task-based language teaching(TBLT) in the world has shown a tendency towards multiple stratifications. However, the research for the complexity of TBLT is not sufficient in terms of different phases of language teaching. What's more, the change of teachers' roles and ideas in TBLT has not been deeply probed into, and there are comparatively fewer practice and research for the application of TBLT in vocational colleges in China. This paper tries to probe into the application of TBLT in Japanese teaching for vocational colleges in China by combining psycholinguistics with the theories of pedagogy, and discuss how to keep the students taking notice of language forms in their communication activities so as to improve their language performance systematically.

KEYWORDS : task-based language teaching(TBLT), Japanese teaching for vocational colleges, effect of Japanese courses, application

1. はじめに

1. 1 研究の動機

この研究は、中国の職業専門学校のカリキュラムの改革に応じ、また職業日本語教育の質をさらに高める要求のもとで提出した。筆者は九州共立大学の姉妹校である上海工商外国語職業学院に、十年以上も勤めてきた。日本語学部の教員の殆どは大学で日本語教育を受け、卒業してからすぐ本学に勤めているので、教え方は大体昔の大学の先生の影響を強く受け、主に文法

中心の指導法を行っている。しかし、職業教育は学術教育とエリート教育ではなく、技術教育とスキル教育を中心に、サービスをモットーにして、雇用ガイドの就職準備教育と言われている。中国もすばやく国際化、情報化社会になってきた。新しい時代に対応した職業専門学校の日本語教育のあり方、特にコミュニケーション能力の育成を目指した指導方法とその評価についての研究を進めていきたい。

* 上海工商外国語職業学院日本語学部

* Shanghai Industry & Commerce Foreign Languages
College Japanese Department

1. 2 研究の目的

十年間ほど日本語の授業を担当してきたが、職業専門学校の日本語学習者は四年制大学の学生と比べたら、進学予定者の質のせいか、学習意欲はもちろん、学習能力もやや低下していると思う。学生のほとんどが、学習パワーが不足するため、ただ興味のあるものだけに学習意欲が高く、味気ない内容の学習に効率と効果の低下を示している。また集中力がわずかの10分ぐらいで、常に携帯とか、PSPとかを手元にして、教師の話の話を全然聞こうともしないで、ゲームとネットに熱中してばかりいる学生の姿は、いつも痛心のほど目に映っている。そのような日本語学習者に、どのようにして言語能力及び言語運用能力を向上させることができるのか、学習者のレベルにふさわしい指導法と学習意欲の向上が何よりも大切だと思う。

そして、うちの日本語学部も本学院の教育理念を踏まえて、今まで頑張ってきた。現在の社会に適應する有能な人材を育成するために、職業学校の教師にとっては、いろいろな工夫をしなければならないと思う。その中に、言語教育の有効な方法の一つとして、タスク中心の教授法を提出したいと思う。特にこの教授法を職業日本語の授業に導入する際、授業効果と実態がどうなるのか、ということを経験課題にした。タスク中心の授業の実態を観察し、分析を行い、実証研究をやって、問題点と課題を検討してみた。

2. タスクとタスク中心の教授法の基本理論

2. 1 タスクについて

タスクとは学習者が課題を達成するために、学んでいる言語を実際に使用することを必要とする作業計画である。正確な言語で発話されたかではなく、与えられた課題に対して、正確若しくは適切な提案内容が伝えられたかという点で評価がなされる。タスクはあらかじめ決められた文法や語彙を学習者に選ばせるようデザインされることもあるが、飽くまでも課題の達成が最終目標であるという状況の下、学習者の注意は文法的な形よりも表現したい意味に向けられ、学んできた言語材料を駆使し自分の意思を伝えることが最優先される。また、タスクは現実の世界で使われているような言語使用を引き出せるようつくられるべきである。そして、タスクはproductive（書く、話す）又はreceptive（聞く、読む）、話し言葉又は書き言葉のスキルと共に、様々な認知プロセスの働きも必要とする¹⁾。

2. 2 タスク中心の教授法について

タスク中心の教授法とは、学習者に完成させるべきタスクを与え、そのタスクを達成するために学生の参加、学習体験、相互作用、コミュニケーション、及び協力で、目的語を駆使させ、今までに学んできた語彙や文型知識を動員させ、その実践する過程に、目的語を再認識した新しい知識を身につけさせ、実践能力を育成しようとするアプローチである²⁾。

この教授法は「構築主義」の理論をもとに、アメリカの教育者デューイが実践主義の教育理論を基礎にして「学生を中心に、実践の中から学ぶ」と主張した教育モードだ。この理論は、学習者の知識の獲得は、主に教師に教えてもらうのではなく、一定の境地(社会文化を含む)の下で、他人(教師と学習パートナー)の力を借りて、コミュニケーションを通じて、必要になる情報を入手して、タスクを完成する。その学習過程は開放的なルートに沿って予期の教学目標に達成するのだ。比較的新しい英語教授法として、いろいろな国の様々な英語の授業で取り入れられている。この指導法の顕著な特徴は、設計されたタスクを達成させることが目的であり、言語の正しさよりも伝達したい意味に重点が置かれるという点である。

3. 中国における実態と研究について

3. 1 中国における実態

この教授法は、20世紀80年代以来、欧米諸国で広く取り上げられ、応用言語学者にも外国語教育実践者にも認められ、受け入れられる外国語教授法だ。中国教育部の設定した新しいカリキュラム標準にも推薦され、提唱された教授法だ。2001年、国家教育部が明らかにタスクベースの教育モードを提出した。交際法の継続と発展として、タスク中心の教授法が注目を集めた。国際言語教育界では、この教授法はすでに20年以上の発展を遂げたが、現在の中国では、この指導法の検討は比較的にいくつかの学際学科、例えば、情報技術工学、コンピュータなどの工科教育の応用に集中しているようだ。ここ数年来、この「言葉でことをする」という教育理論がだんだん中国の基礎英語教室に導入されてきて、外国語課程改革の一つの方向になった。職業学校の日本語教育において、いかにして、この教授法が活用できるのかについて検討することによって、教学の質と効果を高める必要がある。

3. 2 中国における研究概要

中国では、タスクベースの指導法についての研究は、ほぼ全般的に英語教育に集中しており、日本語に関わるものが少ないのが現状である。

タスク中心の指導法が日本語教育に関わる研究として、次のものが挙げられる。

孫伏辰は、参照クラスの二学期の期末試験の成績をもとにして、データを分析と比較してから、タスク中心の指導法が日本語教育のアプリケーションにおいてのメリットを検証した。陳海笑は、主にタスク中心の指導法の方法、原則、プロセス、そしてこの教授法が中国の大学日本語教育現場で実施されるべきだという必要性について論じた。周曉冰は、大学日本語の聴解授業の実態調査を通して、タスク中心の指導法が大学日本語の聴解授業におけるアプリケーション対策について検討し、リスニングの障害を克服する学生を支援するように設計し、彼らの独立した学習意欲を向上させるのを求めようとする。胡岸はある学院の日本語学部の日本語読解の授業効果について考察し、タスクベースの指導法が日本語読解コースにおけるアプリケーションを検討した。

以上の概要から分かるように、タスクベースの指導法についての研究は、主にこの教授法の理論、実施の手順や、メリット、先進性などに焦点を当てたが、中国の国情の下での職業教育の実践と応用的な研究が割りに少ない。特に職業学校の日本語教育におけるアプリケーションの研究が、欠如していると思われる。

4. 研究方法

4. 1 研究対象

本稿は、筆者が担当した上海工商外国语学院日本語学部の、1105クラスの一年生39名を対象とし、初級レベルの授業を主に分析する。タスクベースの教授法を行うためには、文法や言語形式の導入から応用練習への展開まで、どのような順序によって教室活動を進めればいだろうか、タスクと学習項目の形式をどのような形で組み合わせれば、タスクベースの指導法がうまく進展できるのか。教科書にあるタスク中心の指導法に相応しいテキストを取り上げ、一学年の時間にわたって、初級日本語学習者の授業の実態を観察し分析を行い、問題点と課題を検討してみた。

4. 2 実施方法

授業のカリキュラムはできるだけ教科書にある素材

を活用し、実生活を中心とし、家族関係や趣味関係、生活関係に関する学生の興味があるタスクを作った。使った教科書は次の通りである。

表1 取り上げた教科書

教科書名	基础日语（一）（二）
編集者	周英华，赵平等
出版社	上海交通大学
出版年	2009年3月

教科の中にタスクに活用できるテキストのリストは 次のようである。

表2 タスクに活用できるテキストのリスト

目次	テキストに出てくる主な文型	設計したタスク内容
第6課 日曜日	～を～ます／ません（か）／ましょう ～は～に／で／と～ます（5課）	日曜日のスケジュールを相談する
第9課 デパート	～に～が～あります／います ～は～に～あります／います	学校の体育館の位置を尋ねる
第12課 家族	～をしてください；～ています	描かれた特徴でクラスメートを特定する
第14課 寮のルール	～てもいいです／～てはいけません ～から、～；～てから； ～ないでください；～なくてもいいです； ～なければなりません（13課）	依頼表現 相談・許可をもらう
第15課 漫画	～（こと）ができます；趣味は～ことです	自分のできること
第17課 旅行の思い出	～する／したことがあります； ～たり～たりします	思い出について
第21課	～をくれる；～してあげる／もらう／くれる	プレゼントの交換
第27課	～した（しない）ほうがいいです	人にアドバイスをする／もらう表現
第28課	～と言っています	伝達・伝言表現
第31課	～（ない）ようにします；～ようにしてください	願いと要求の伝達

以上の授業でタスクベースの教授法を行う時、学習者のレベルを常に頭において考えなければならないと思う。普通は日本語の知識を十分に身につける中、上級学習者に学習項目を提示しないほうが基本であり、まずタスクを実行してから、学習項目を提示する。そして、練習をしてからタスクを遂行する。しかし、これらの授業は一年生の日本語学習者を対象として行うため、簡単な日常生活の会話はまだ話せるレベルに達していないから、最初に学習項目を提示し、練習をする、そしてタスクは応用練習のために導入されるパターンを取った。

4. 3 結果の分析と考察

一年にわたって、日本語の授業は教科書第二冊の33課までやったが、タスクベースの指導法の授業に適したテキストを再設計し、授業の実態を観察しながら、分析してみた。次の結果が出てきた：

（1）昔と比べたら、クラスの雰囲気が変わった。ロールプレイをするから、新鮮さを持ちながら、学生は興味が湧いてくるように見える。（2）学生の反応を観察すると、教師の指示に従い、すぐ活動を行う学

生もいれば、どう対処してよいかわからない様子を見せる学生もいる。（3）授業時間が常に不足しているような気がする。学生が39人もいるから、ペアやグループになってタスクを行っている、予定した授業進捗がいつも遅くなってしまう。（4）タスクを実行する際に、教師の説明や指導不足で学生が一時期無秩序の状態になったときがある。（5）ロールプレイを実行する時間が長くなってしまったため、ロールプレイに新鮮さを失って、ある学生がまるで他人事のような顔をしており、ゲームやおしゃべりをし始めた。（6）ユニットテスト、中間テスト、期末テストの成績を総合的に見たら、平均点が思った通りに大いに上がらなかった。

この結果によれば、タスクベースの指導法は確かに学生の学習意欲を向上させできるが、必ず最終の試験成績と直接に関わると思わない。また、タスクの実行には教師の役目が前より大きいと思う。タスクの設計、内容の説明、時間などにいろいろな工夫が必要になり、教師経験の浅い人にとってはかなり難しい。

5. まとめと課題

経済のグローバル化の発展につれて、中国は世界各国との経済協力も日に日に増えていく。職業日本語も大きな発展のチャンスに直面し、社会経済にますます重要な役を担っていくと思う。今の社会は国際複合型人材のニーズがますます高まり、このような総合的な人材の育成も緊迫してきて、職業日本語教育も大きな挑戦に直面している。高等職業専門学校の日本語教育の中に、タスクベースの教授法が導入するのは、教室で実際の活動シーンがシミュレートできるし、日本語を使ってコミュニケーションの能力も育成できる。この教育実践から、タスクベースの教授法が学習者の学習意欲を奮い立たせ、総合的な言語運用能力を育成させ、学生の全面的な発展にも有利だと実証できる。したがって、日本語の授業にタスクベースの教授法を導入するのは、ますます多くの日本語教師の選択となっていると信じている。しかし、職業学校の学生の特徴を考慮しながら、言語教育の組織と実施を考えなければならない。教育内容の伝授に、学生の受け入れ程度と受け入れる能力も考慮しなければならないと思う。

職業専門学校の日本語教育は学習目標と要求が多様性を持っているが、従来の指導法は単に教育内容、重点と難点、教育ステップに焦点を当てている。教育大綱と教材に規定されている言語項目で授業をするのが強調されている。そこで、従来の指導法がもう今の職業日本語の教育活動に適していないと思う。タスクベースの指導法を行ったこの実証研究から、教師の役割が非常に大きいと初めて気づいた。教育活動で、特定のコミュニケーションと言語項目をめぐって、具体的、操作可能な言語活動をデザインするのは教師の役目である。学習者が言語表現、コミュニケーション、交渉、解釈、相談などを通じて、タスクを達成し、言語をマスターする目的とする。

タスクベースの教授法は教師により大きなゆとりが提供でき、教師が学生と教育リソースの具体的な状況に応じて、教育活動をデザインできる。この教授法は教師により多いより高い要求を求めると言える。(1) 学習目標やニーズに基づき、タイムリーに教育内容と方法を調整する。教師は学生の現実における本当の言語要件が分かるこそ、学生の本当のモチベーションと学習意欲が向上できる。(2) 明確になった学習ニーズを分類して、状況に応じて違ったタスクを設計するのは必要だ。コミュニケーションのすべての側面が網羅できるようにデザインしなければならない。(3)

学生がタスクを達成する過程に、必要なヘルプとサポートを提供し、学生のコミュニケーションに励むべきだ。途中に学生の言葉や文法の間違いをその場で指摘し、学習の意欲を挫けないように常に心掛けなければならないと思う。ゆったりとした雰囲気を作り出し、学生を大胆に実践させるべきだ。教育の過程に、意味の伝達とタスクの達成が言語の表現に優先するのは常に覚えなければならない。(4) 学生が教室でタスクの発表をした後、タイムリーにフィードバックを与えながら、ほかの学生にもフィードバックを求めることより、学生にタスクの具体的な目標を明確にさせる。(5) 適当なタスクを設計する必要がある。所謂適当なタスクとは、難易度から見れば適宜なタスクで、難しすぎたら、学生がつる無き弓に羽拔鳥になってしまい、簡単すぎたら、学生のやる気が引き出せない。したがって、タスクベースの教授法を採用する時、学生の表現と要求によって、その時その場に応じて、適切な応答を必要とする。そして、タスクの状況を最大限に考慮される必要がある。

今後の課題として、次のものを解明したい。(1) 言語教育のさまざまな段階に、タスクベースの指導法の複雑さについて。(2) タスクベースの指導法のもとで、授業のオーガナイザーとして、教師の役割と考え方の変わりについて。(3) 有意義なコミュニケーション活動において、どのようにして学生に正しい言語形式が保持できるのかを求めて、企画的に学生の言語能力の運用を促進することについて。(4) 学生の人数が多い職業教育の教室で、タスクベースの教授法が実行可能なフレームワークを提供する方法の検討について。(5) いかにしてタスクの大綱の規範を定めて、タスクの選択の任意性の解決について。これから長時期にわたって、タスクベースの授業実態を測定し、フィードバックや授業後のアンケートなどを通して、学習者のコミュニケーション能力がどのぐらい向上させるかについてもっと研究していきたい。

Received date 2012年12月26日

引用

- 1) 2) 吉川実樹ら『TBLT導入による英語授業の改善』愛知県総合教育センター研究紀要 98集

参考文献

1. 石田敏子 (1988) 『日本語教授法』大修館
2. 岡崎敏雄・岡崎眸 (1990) 『日本語教育におけるコ

- ミユニカティブ・アプローチ』凡人社
3. 日本語教育学会編（1995）『タスク日本語教授法』凡人社
4. 青木直子 土岐哲 尾崎明人（2001）『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社
5. 村野井仁（2006）『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館
6. 吕良环（2001）《国外外语教学改革趋势》全球教育展望
7. 肖坤学（2001）《经济全球化：外语人才培养的机遇与挑战》广州大学学报
8. 戴德忠（2004）《日语教育在中国》人民中国
9. 卢贤梓（2006）《日语专业建设与应用型人才培养》广东培正学院学报
10. 刘绮霞（2009）《日本在华企业所需专业人才培养模式的探讨》商场现代化
11. 刘林涛（2004）《“任务驱动”教学模式的研究与实践》现代教育科学
12. 韩宝成（2003）《语言测试的新进展：基于任务的语言测试》外语教学与研究
13. 方文礼（2003）《外语任务型教学法纵横谈》外语与外语教学
14. 孙伏辰（2011）《任务型日语教学法之实证研究》时代教育
15. 陈海笑（2011）《浅谈任务教学法在大学日语教学中的应用》科技创新导报
16. 周晓冰（2012）《“任务型教学法”在高校日语听力课教学中的应用研究》三门峡职业技术学院学报
17. 胡岸（2012）《任务型教学在大学日语阅读教学中的应用》课外阅读